

朱印船貿易・日本町関連書籍所載地図 ベトナム部分の表記について

蓮 田 隆 志

I

先頃刊行が開始された『岩波講座 日本歴史』近世2に木村直樹氏の「近世の対外関係」という論考があり、その119頁に「朱印船寄港地と日本人町・華僑の町」という図が掲載されている〔図1：木村図〕。これによると、「ケチュウ」（現在のハノイ）に華僑活動地があり、紅河sông Hồngを挟んだ対岸に「ルーキン」という別の地があって、そこに「日本人在住地」が存在していたことになっている。地図の出典は荒野泰典（編）『日本の時代史14 江戸幕府と東アジア』（吉川弘文館、2003）となっている〔図2：荒野図〕。

この「日本人在住地ルーキン」の実在につき、筆者は永らく疑問を持っていたが追求しないまま放置していた。というのも、これに当たる地名に心当たりが無いものの、17世紀中葉のトンキンで政権に食い込んで活躍した商人である和田理左衛門¹の娘が、ハノイの対岸、現在は窯業の町として知られるバッチャン（Bát Tràng、鉢場）の人間に嫁いだことが現地の家譜から知られており²、この時代のことでもあるので、西洋史料にそのような記載があるのではないかという思いも拭いきれなかったからである。近時、荒野泰典氏にこのことをお尋ねする機会に恵まれた。本稿では、そこで判明したことを紹介するとともに、この機会に、代表的な朱印船貿易・日本町研究書収載地図のベトナム部分に関して、現在の研究状況を踏まえて、訂正を加え注釈を施す。

1 その事跡は、永積洋子『朱印船』（吉川弘文館、2001年）、209-211頁参照。

2 ファン・ダイ・ゾアン「一七世紀のあるベトナム—日本人家族について：バッチャンの『阮氏家譜』を通じて」（大西和彦・訳）、櫻井清彦・菊池誠一（編）『近世日越交流史：日本町・陶磁器』（柏書房、2002年）、pp.89-93。

これらの地図は中高の歴史教育（日本史と世界史の双方）や大学の教養講義での教材作成、専門分野外の人間による教科書・概説書執筆などの場面で、意外と大きな影響力を持っていると思われる。しかし、南洋日本町や朱印船貿易の研究は日本史と東洋史（東南アジア各国史のみならず、中国史の知識も必要である）、西洋史（東西交渉史）の重なり合うエキサイティングな領域でありながら、戦後はどの分野でも傍流となってしまったため、個別の事実確認レベルにおいて研究の進展が相互に反映されにくく、戦前からの誤りがそのまま引き継がれているものすらある。実はこの点では、一度出版してしまうと修正が困難な学術書よりも、定期的に改訂が行われている中学歴史・高校地歴科（日本史・世界史双方）の教材の方が柔軟に対応可能なのだが、その性格上、「修正された結果」のみ示されて、その根拠が明示されることはほとんど期待できない⁴。本稿では、ベトナム部分に限定されるが、できる限り丁寧に解説を加える事で、古典的業績のどこが今でも価値を持ち、どこが更新されるべきかを明示⁵したい。

II

荒野氏からの私信によると、『日本の時代史』の地図は永積洋子『朱印船』（吉川弘文館、2001）所載地図〔図3：永積図〕と『週刊朝日百科日本の歴史31 中世から近世へ—⑨出島と唐人町』（朝日新聞出版、1986年）所載地図〔図4〕を合成して吉川弘文館の編集部にて作成依頼したものとのことであった。「ルーキン」が記載されているのは〔図4〕である。この図は「日本町と唐人町：内

3 教科書に採用された場合、入試に出題されてしまう可能性もある。

4 むろん、専門書より簡略化した記載となるために、結果として古く誤った情報が掲載されていないだけのこともある。

5 ここで記したように、本稿は高校の教育現場への情報提供も強く意識しているので、オリジナルな出典が外国語の研究であっても、（その気になればそれらに当てられるような注記のある）日本語文献を優先して引用する。

この他、桃木至朗氏が個人ブログで情報を発信するなど、改善の動きが出ている。桃木至朗「東南アジア史 誤解と正解」（「第4回全国高等学校歴史教育研究会」発表資料（2006年8月2日）、http://www.let.osaka-u.ac.jp/toyosi/main/seminar/2006/momoki_honbun.pdf、最終閲覧日：2015年1月1日）5－6頁、同『わかる歴史 面白い歴史役に立つ歴史』（大阪大学出版会、2009年）196頁注3も参照せよ。

と外」(執筆・中村質氏)という部分に掲載されているのだが、目次によると朝尾直弘・斯波義信・横井成行の3氏による合作とある。それゆえ、以下では「朝尾図」と呼ぶことにする。

朝尾図は「朱印船航路と日本人・華人在住地」と名付けられている。日本人関連は日本町と日本人在住地とが区別されている。この区分の初出は、管見の限り岩生成一『近世初期の対外関係』(国史研究会(編)「岩波講座 日本歴史」、岩波書店、1934年)の附図「南洋移住日本人分布図」に遡り、多少の改訂を経ながら、以降の岩生氏の著作にたびたび登場する。朝尾図もこの岩生氏の著作のうちのどれかを引き継いだと思われる。実のところ、岩生氏の諸著作における日本町の定義は、日本人のみが特定の地域に集団をなして集落を形成する場合を「日本町」とするといった程度で、規模の大小や自治・内部統制の有無、「日本人」の範囲などを含めた積極的な定義を与えていない。「日本人在住地」は定義らしきものも見当たらず、日本人と他国人とが雑居している場所であることが、日本町に対する緩やかな定義から論理的に導き出されるに過ぎず、「日本人之雑居地」「日本人居住地」など表記も揺れている。また、関連研究や高校歴史教育教材においては、日本町と日本人町という2つの表記が併存しているが、これも管見の限り区別・定義されていない。

華人については「華人活動地」として南宋(12~13世紀)、元(13~14世紀)、明(16~17世紀)という3種類の色違いの●印が用いられている。かなり長期のデータを一枚の地図にプロットしたもので、同じ地図にあっても、16世紀末から17世紀にほぼ限定される朱印船貿易・日本町関連の情報とは性格を異にしている。そのため、地名の表記も華人関連の地名は12~17世紀のどこかに存在した表記ということになり、朱印船貿易時代の文脈だけで判断することはできない。

朝尾図のハノイ近郊を拡大した〔図5〕にあるように、現在のハノイ付近には、宋元明3時代の●印があり、その右に「ルーキン」とある。そして下段に「交都」の文字と「日本人在住地」を示す▼印とが並んでいる。つまり、朝尾図の段階では「ルーキン」は華人活動地(居住地)の名称で、「日本人在住地」は「交都」だったのだ。そして作図の都合上、ハノイ付近に多くの記号が並置されたため、必ずしも正確とは言えない場所にも記号が置かれることになった。これが荒野図作成の段階で、何らかの手違いから「ルーキン」が「日本人在住地」として、ケチョウと紅河を挟んだ対岸にプロットされてしまい、ケ

チョウとルーキンとが分離されてしまったのだ。すなわち、実際はルーキン＝ケチョウ＝東京（トンキン）＝現ハノイであり、いずれも同一地点である。ケチョウに日本人が在住していたのは確かだが、日本町を形成していたことを確認する史料は無いので、位置の問題はこれで説明できる。さらに、荒野図・木村図では、ルーキン以外にも、トンキンとケチョウとが別の町であるように読めてしまうので、今後この図を転用する場合は適切な凡例や注釈を補う必要がある。なお、町の位置はケチョウの場所が正しい。

「ルーキン（龍京か?）」は、中国史料にそのような表記があって、中国史・華僑史を専門とする斯波氏が採用したと思われるが、管見の限りでは典拠を見いだせなかった。「交都」は「交趾の都」ということだろうが、やはり典拠を探り当てられなかった。いずれも後考に俟ちたい。

III

ここでは朱印船貿易の時代に相当する時代のベトナムの各種地名表記について整理するが、その前にベトナム語での固有名詞表記の特徴を確認しておく。ベトナムの地名や固有名詞（寺社仏閣など）には、漢字で書き漢越音（ベトナム漢字音）で読む漢字名（テン・チュー・tên chũ:直訳すると「(漢)字の(ある)名前」）とベトナム語固有語を主に用いた口語名・俗語名（テン・ノム・tên nôm）とがある。後者の場合、しばしば漢字表記が存在しないためチュノムでしか表記できず、語順もベトナム語の語順になることが多い⁷。正確には対応しないが、「浅草寺」に「せんそうじ」と「あさくさでら」の2つの読みがあるのに似ている。

17世紀中葉の時点で存在したのは黎朝大越国である。大越Đại Việtの国号は自称だが、中国や日本など漢字文化圏との交流には、唐代の安南都護府に由来し、歴代中華王朝から与えられた安南An Namという国号を用いていた⁸。黎朝皇帝に実権はなく、王を称する鄭氏が最高権力者であった。そのため鄭氏政権

6 日本町の要件は、さしあたり、上述した岩生氏の定義に従う。

7 ベトナム語は原則として後置修飾である。

8 国内でも安南が通用していたことは、桃木至朗「近世ベトナム王朝にとっての「わが国」」木村汎、グエン・ズイ・ズン、古田元夫（編）『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』（世界思想社、2000年）、18-39頁。

とも呼ぶ。しかし、鄭氏に敵対する阮氏が、順化を本拠としてこれ以南⁹の地域を支配し、黎朝の正朔を奉じながらも独立勢力として存在していた。つまり、政治権力の実態としては2つに分裂していたわけである¹⁰。また、現在のビントゥアン・ニントゥアン省地域にはチャンパが存在し、さらにその南、バリア・ブントウ省以西の地域はカンボジアの勢力圏であった。しかし、17・18世紀を通じて南進を続ける阮氏に圧迫され、これらの地域は徐々に阮氏の領土に組み込まれていった。

現在のハノイに当たる町のこの時代の正式名称は東京Đông Kinhである。西洋史料において鄭氏政権下にある地域やその地域を支配している国家を指す「トンキンTonkin / Tonking」（日本史料は「東京」「トンキン」と書く）はこれに由来する。一方、口語ではケーチョ（Kẻ Chợ：直訳すると市場地域）と呼ばれており、西洋史料にもしばしば見られる。永積図・木村図・荒野図の「ケチヨウ」とはこのことである¹¹。また、李朝以来の昇竜（タンロン、Thăng Long）も引き続き使用された。

日本史料は阮氏政権およびその支配下にある地域を「交趾」あるいは「広南」と記す。前者は、有名な「茶屋交趾貿易渡海絵図」に「河内」とあるように、「こうち」と読む。これは漢代に現在の紅河デルタに置かれた交趾郡に由来し、10世紀のベトナム独立後もベトナム全体の別称として安南と並んで用いられてき

9 より正確には、現在のクアンビン省内を流れるザイン川（sông Gianh、漢字名は灤江）以南。

10 阮氏側の立場から書かれた史料には、鄭氏側を「北河」、阮氏側を「南河」とするものがある。また、口語では前者をダンゴアイ（Đàng Ngoài、直訳は外側・外の道）、後者をダンジョン（Đàng Trong、直訳は内側・中の道）とも呼んだ。

11 ケーチョとケチヨウのような細かな表記の違いは無数にある（ケーチョと表記することもあり、また、ベトナム語の構造を考えると、ケー（ケ）とチョの間に中黒を挟む表記もあり得る）。その主な理由は、①外国語をカタカナで表記するときの研究者ごとの流儀の違い（漢字表記の場合も、異体字や部首の違いの別漢字をどこまで区別するかなどで差が出る）、②何語の発音を採用するかの違い、③用例ごとの綴りの違いを正確に再現しようとするかどうかの違い、などである。表記の揺れ自体が言語・文化研究における学術的意味を持つこともあるので、専門研究でこれを統一するのは有害なことが多く、定期試験や大学入試で無理に統一すると生徒の学習意欲を削ぐ危険性もあるが、表記の揺れと単なる誤りとは区別する必要がある。例えば、Societas Iesu（Society of Jesus）の訳語として、「イエズス会」以外に「ジェズイット会」は許容範囲だろうが、「イエズス会」は許容できまい。概説書レベルではある程度のガイドラインが必要だろう。

た語である。一方、西洋人は阮氏支配下の地域を「コーチシナCochinchina」「コチンチナ」などと呼んだ。¹²日本史料に見える、中部ベトナムに位置する阮氏領を指す「交趾／こうち」の用法は、西洋史料の「コーチシナ」や「コチンチナ」に対して漢籍に古くから見られる「交趾」という漢字を当てた新しい用法だと考えられる。木村図のベトナム南部にある「コーチン」というカタカナ表記は、あまり適切な表記と思われぬ。また、位置もチャンパと入れ替えるべきだろう。なお、「交趾支那」という表記は、管見の限り同時代史料に存在しない。¹³

明の張燮『東西洋考』は「交趾」をベトナム全体に用い、その一部である阮氏領を「広南（港）」とする。¹⁵清朝の記録にも阮氏領を「広南」とするものが多数ある。¹⁶オランダ史料は「クイナムQuinam」を用いているが、これは「広南」の中国語南京音に由来するという。¹⁷日本史料における「広南」にも、「クイナム」¹⁸と読ませるものと「くわうなん（こうなん）」と読ませるものの両方がある。

12 マレー語のKuchi Chinaの対音で、Kuchiは交趾の古音ないし広東語音に由来するという。16世紀前半に成ったトメ・ピレス『東方諸国記』では、ベトナム全体のことを指しており、鄭氏と阮氏との分立・対立に伴って、後者のみを指すようになっていったようだが、ロフォムMichel van Lochomの「アジア図Carte de l'Asie」（1640年）など、ベトナム全体やトンキンを主に指す使用法も残った。アンソニー・リード『大航海時代の東南アジアⅡ 拡張と危機』（平野秀秋・田中優子・訳、法政大学出版局、2002年）、459頁註1。トメ・ピレス『東方諸国記』（生田滋ほか・訳注、岩波書店、1966年）、227-228頁、Li Tana and Anthony Reid eds., *Southern Vietnam under the Nguyễn: Documents on the Economic History of Cochinchina (Đàng Trong)*, 1602-1777. (Singapore: ISEAS, 1993), pp.2-3.

13 ベトナムを植民地化したフランスは、19世紀末に阮朝領を保護領トンキン（東京）、保護国アンナン（安南）、直轄植民地コーチシナ（交趾支那）に三分した。それぞれの語は、ここに見られるように近世以前に遡るが、その指し示す地理的範囲は、直接には19世紀、阮朝の北圻・中圻・南圻という地理・行政区分に由来する。

14 交趾と交阯とは、どちらも古くから混用されていたが、一般には交趾を使うことが多い。

15 順化が阮氏領であることには触れていない。

16 桃木至朗「広南阮氏と「ベトナム国家」『南シナ海世界におけるホイアン（ベトナム）の歴史生態的位置』Ⅰ（平成2年度文部省科学研究費（海外学術研究）報告書No.02041055、1995年）、36-37頁。

17 岩生成一『南洋日本町の研究』（岩波書店、1966年）、20-23頁。

18 クイナムの例は『異国御朱印帳』（村上直次郎・訳注『異国往復書翰集、増訂異国日記抄』、改訂復刻版、雄松堂書店、1966年所収）、274-275頁；異国日記刊行会『影印本 異国日記：金地院崇伝外交文書集成』、東京美術、1989年、190頁。くわうなんの例は『異国渡海御朱印帳』（前掲、村上訳注『異国往復書翰集、増訂異国日記抄』所収）、318頁；前掲、『影印本 異国日記』168頁。

阮氏領は順化（トゥアンホア、Thuận Hoá：現在のクアンビン省からトゥアティエン＝フエ省）と広南（クアンナム、Quảng Nam：現在のクアンナム省およびダナン中央直轄都市以南の地域）の2地域に分かれる²⁰。日本史料に見える「順化」は「ソンハ」「スノハイ」などと読ませる。岩生成一氏は、西洋史料のセノアSenoa、シノアSinoa、シンホアSinhhoaなどに対応し、いずれもThuận Hoáを写したものとするが²¹、筆者は、ベトナム語のスー・ホアxứ Hoáを写した可能性の方が高いと考える。阮氏の本拠地は一貫して順化に置かれてきたのだが²²、上述したように阮氏領全体を「広南」と呼ぶ用法が存在する。広南には、阮氏領最大の交易港であるホイアン（フェフォ／フェイフォ）²⁴が存在したからである²⁵。

19 現代ベトナムではHóaという表記も多く見られる。主母音の上に声調記号を置くという正書法に従えばHoáなのだが、ベトナム語IMEのバグのために現在ではこのような非正書法的な表記が広まっている。

20 行政単位としては処（處）xứとなるが、道đạo・鎮trấnとも言う。

21 岩生成一『新版 朱印船貿易史の研究』（吉川弘文館、1985年）、152-153頁、前掲、同『南洋日本町の研究』、20-21頁。但し、岩生の考証においては、西洋史料に現れる綴りと現代ベトナム語の綴りとが混在し、特に後者には（おそらくは印刷上の技術的問題による）不正確な綴りや誤った理解も見られるので、注意が必要である。

22 口語で順化のことで、「(順)化地方」ということになる。xứは「地方」「地域」「地片」の意で、同時に最上級地方行政単位「処」のことも指す。

23 但し、現在のフエが本拠となるのは17世紀末になってからで、それ以前は現在のクアンビン省内やフエ付近を転々としていた（藤原利一郎「ヴェトナム諸王朝の変遷」『(旧版) 岩波講座 世界歴史 東アジア世界の展開Ⅱ』（岩波書店、1971年）、472頁）。概説書類では、最初からフエに本拠を置いていたかのように読める記述も見られるが、正確ではない。阮朝の正史『大南寔録 前編』によると、阮氏の本拠は次のように移動した。愛子営（クアンチ省チエウフォン県：1558-70）→茶鉢営（クアンチ省チエウフォン県：1570-1600）→葛営（クアンチ省チエウフォン県：1600-26）→福安営（トゥアティエン＝フエ省クアンディエン県：1626-35）→金龍営（フエ市キムロン区：1635-1687）→富春営（フエ：1687-1711）→博望営（トゥアティエン＝フエ省クアンディエン県：1712-38）→富春営（フエ：1738-）。

24 ベトナム史料に見える漢字名は会安で、西洋史料ではFaifoないしそれに近い綴りがほとんどである。ファイフォー=Faifoは会安舗Hội An phốに由来するというのが通説のようだが、異論もある。グエン・ディン・ダウ「商港ホイアンの形成と発展」、日本ベトナム研究会議（編）『海のシルクロードとベトナム』（穂高書店、1993年）、225-228頁参照。「フェフォ」という表記はこのFaifoのフランス語読みだが、19世紀にベトナムがフランスの植民地になったためにフランス語読み表記が慣用として日本で広まっただけであって、学術的根拠は何もない。

25 ホイアンの西郊にある広南の政治・軍事的中心である広南営đình Quảng Namがこれを監督していた。菊池誠一『ベトナム日本町の考古学』（高志書院、2003年）99-131頁。

以上のように、「安南」や「交趾」などの地名が指し示す範囲は複数あるため、用例を個別に検討する必要があるが、ここでは朱印状に記された渡航地に限定する。朱印状に記された渡航先・実際の朱印船の渡航先については、従来、岩生氏の『新版 朱印船貿易史の研究』127頁の第2表（年次別地方別渡航朱印船船数表）が多く利用されてきた。しかし、ベトナムに限定しても、この表は171頁の第4表（朱印船渡航地別集計表）と特に説明の無いまま一部数値が食い違っているなど不十分・不親切な点があるので、その点を補足しておく。朱印船貿易時代の初期には、渡航地として安南、交趾、東京、順化、広南、迦知安、天南国が見られる。²⁶ 安南には鄭氏領に渡航した場合と阮氏領に渡航した場合の双方が含まれていたが、1611年で発給が途絶える。これに代わるように登場するのが交趾である。1612年以降は、鄭氏領は東京、阮氏領は交趾という使い分けで安定し、総数でもこの2カ所が他を大きく引き離して多数を占めている。

順化は第2表では1だが、第4表では2となっている。これは慶長11年（1606）9月19日付天南国向け朱印状（原彌次右衛門宛）が、実際にはスノハイに渡航するためのものだったために、²⁷ 第4表では順化に加算したものと思われる。広南は第2表に見られないが、本文で言及されているので、²⁸ 交趾に算入したと思われる。このように、第2表は一見網羅的な集計に見えながら、岩生氏が独自の判断で数字を丸めている部分があるので注意が必要である。²⁹ 迦知安向け朱印状は慶長9年（1604）の1通しか出されていないが、これはベトナム語のケーチエムKè Chiêm（「チャム人の土地」の意）を写したもので、ホイアンなど現在のクアンナム省・ダナン中央直轄市周辺、ならびにその中心地である広南營を指した。³⁰

26 占城も実際には阮氏支配下の港に入った可能性が考えられるが、ここでは除外しておく。

27 『異国御朱印帳』（前掲、村上訳注『異国往復書翰集、増訂異国日記抄』）、275頁；前掲、『影印本 異国日記』、190頁。

28 前掲、岩生『朱印船貿易史の研究』114-118頁。

29 また、第2表と綴じ込みの第7表（個人別・年次別朱印船派船表）とを対応させるには、原史料に当たらなければならない。それ故、渡航地・年次・朱印状受領者を網羅的に対応させた表は、実のところまだ存在しないのである。

30 桃木至期「大ベトナム展の話（2）～迦知安とはどこか？」『ダオ・チーランのブログ・バシフィック』2013年4月13日（<http://daiviet.blog55.fc2.com/blog-entry-797.html>、最終閲覧日：2015年1月1日）；前掲、岩生『南洋日本町の研究』、21-22頁。

IV

以上を踏まえた上で、代表的な朱印船貿易・日本町研究の関連地図のベトナムに関する箇所を検討を加える。取りあげるのは、ここまでで取り扱った木村図、荒野図、永積図、朝尾図に加えて、この分野の古典的研究であり、他図の基盤となったと思われる岩生成一氏による『新版 朱印船貿易史の研究』（吉川弘文館、1985年）所収の「朱印船渡航地考定図」〔図6：岩生図a〕、「朱印船主要航路考定図（193頁）」〔図7：岩生図b〕、『続 南洋日本町の研究』（岩波書店、1987年）所収の「日本人南洋移住考定図」〔図8：岩生図c〕³¹である。東南アジア史ではなく、日本史の著作を取りあげるのは、戦前・戦後を通じて世界的にこの分野を牽引してきたのが岩生氏や永積洋子氏をはじめとする日本対外関係史の研究者だったからである。³²

まず、朝尾図において19世紀に成立した港町ハイフォン（Hải Phòng、海防）が記載されているが、不適当である。³³この点は、本稿で扱うその他の図には見られないが、他の一般書にしばしば見られる誤りである。また、岩生図a、b以外の図では、海南島の北と南どちらを回るかの差はあるが、トンキンへの朱印船の主要航路として、現ハイフォン付近、すなわちタイビン川水系の河口に着岸する航路が描かれているが、これは肯んじ得ない。マカオから来るポルトガル船は海南島の北を通過してタイビン川水系に入っただろうし、オランダ船もタ

31 これ以外の岩生による代表的著作である『南洋日本町の研究』（岩波書店、1966年、初版：南亜文化研究所、1940年）所収図に存在する問題点の多くは岩生図cと共通するので、基本的に本稿では扱わない。また、『新版 朱印船貿易史の研究』は1958年に弘文堂から発行されたものの改訂版である。IIで触れた『近世初期の対外関係』など多くの著作で岩生図a、b、cと似たような地図が掲載されているが、それほど大きな違いはないのでアクセスしやすい現行本を用いる。

32 蓮田隆志「東南アジアの近世をめぐって」（『東南アジア 歴史と文化』32、2003年）、91頁。

33 前掲、永積『朱印船』、153頁の地図も、ハイフォン、ナムディンという19世紀以降の都市名が記されていて不適切であるほか、ドゥオン川sông Đuôngをドゥナン川とする誤植がある。

34 タイビン川水系hệ thống sông Thái Bìnhというのは現代の用語だが、河口部である現在のハイフォン中央直轄市付近は、タイビン川以外にもヴァンウック川sông Văn Úcなど多数の河川が合流・分流を繰り返しており、流域によって多くの河川名が存在する。17世紀の史料に現れる河川名と現在の河川名を正確に同定するのは困難である。

イビン川流域のドメアDoméaに着岸し、そこから内水路を使って商館のある東京やフォー・ヒエン（Phố Hiến、舗憲：現在のフンイエンHung Yên市）に達した。³⁵ 朱印状は日本人以外にも発給されたため、朱印船にもマカオを経由するなどしてタイビン川水系に着岸したものがあつたかも知れないが、角倉船など多くの日本船は朝尾図や岩生図bにある父安（ゲアン、Nghệ An：現在のゲアン・ハティン両省の境をなすラム川sông Lam河口付近の河川港）に着岸し、³⁶ 上京する場合はそこから海岸沿いに北上して、ダイ川sông Đáy（どちらの地図にも記載がないが、河口部で現在のナムディン省とニンビン省の境をなす）から東京に至った。

岩生図bでは父安とは別に、紅河本流河口とおぼしき場所にギアンという地点が記されている。これはオランダ史料に見えるGijangh（ギヤング）を、漢字「江」の漢越音Giangの対音だと見なして、紅河河口（バーラット海口、cửa Ba Lạt）に比定したもののだが、ベトナム語のGiangは「ザン」と発音するので誤りである。父安はしばしば「義安Nghĩa An」と記され、18世紀末の西山朝では実際に義安と改称された。³⁷ オランダ史料のGijanghはこれを写したもので、父安のことである。よって、海南島の北を通して「ギアン」に着岸する航路は不適切である。

また、岩生図b、cと朝尾図で父安やトンキンと順化・広南とが朱印船の航路として線で結ばれており、朝尾図の航路は日本からコーチシナに朱印船が直行

35 Hoang Anh Tuan, *Silk for Silver: Dutch-Vietnamese Relations, 1637–1700*. (Leiden & Boston: Brill, 2007), pp.36–39; 加藤栄一「十七世紀中葉連合東インド会社の対日交渉と情報伝達網〔第二部〕」（『東京大学史料編纂所研究紀要』3、1993年）、3–7頁。但し、加藤論文は前述のハイフォンが当時存在していたと誤解しているなど、不適切な記述もあるので注意が必要である。また、ドメアの位置比定についてはベトナムの歴史学界で論争がある。フォー・ヒエンについてはHoang Anh Tuan, *loc. cit.*のほか、金永鍵『印度支那と日本との関係』（富山房、1943年）；Association of Vietnamese Historians, and People's Administrative Committee of Haihung Province ed. *Pho Hien: the Centre of International Commerce in the XVII th–XVIII th Centuries*. (Hanoi: The Gioi Publishers, 1994) を参照。

36 蓮田隆志「文理侯陳公補考」（『東アジア——歴史と文化』23、2014年）、29–49頁。Li Tana, *Nguyễn Cochinchina: Southern Vietnam in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. (Ithaca, New York: Southeast Asian Program, Cornell University), pp.60–63. 地名は記されていないが、岩生図cにも父安に当たる場所に航路が引かれている。但し、その航路はトンキンもしくは広南を経由して達するようになっており、不適切である。

37 『大南一統志』巻14父安上、建置沿革（印度支那研究会、1941年、1504頁）

せずにトンキンを経由するように描かれている。少なくとも17世紀初頭以降は、鄭氏と阮氏との対立が始まっており、広南阮氏がトンキンに朱印船を渡航させないよう江戸幕府に働きかける手紙も残されていることから、朱印船の航路としてこのようなルートはあまり現実的でない。これらの点は、永積図の段階で修正されており、荒野図・木村図にも引き継がれている。但し、鄭氏領と阮氏領との間で海上交易があったことも確かなので、今後、新たな史料によって朱印船が鄭氏領と阮氏領とを跨いで交易したことが実証される可能性は残っている。

次に阮氏領における記載を検討する。阮氏領最大の交易港は広南にあり日本町も存在したホイアンである。しかし、本稿で扱う地図の多くでは、ホイアン以外にもフエ（順化）やツーランが朱印船の渡航地として記載されている。この点から検討しておきたい。

朝尾図と岩生図aでは、フエ（ユエ）＝順化となっており、かつ朱印船の渡航地・寄港地になっている。「ユエ」がフエHuế⁴⁰のフランス語読み表記である点はさておき、都市フエが成立するのは注22にあるとおり、1687年以降であって、朱印船貿易時代において「順化」がフエを指すことはあり得ない。現在フエが位置している場所は順化処の一部ではあるが、阮氏の本拠地でも朱印船の渡航先でもなかったからである。朱印船貿易時代の「順化」は、「漠然と阮氏領全体ないし阮氏政権という政体」を指すか、「（阮氏領のうち）阮氏の本拠地の置かれた地域、つまり現在のクアンチ省」を指すとみなすべきである。また、順化宛の朱印状はごく少数しか発給されておらず、順化に向かった朱印船はごく初期を除いて存在しなかったと考えられる。

岩生図cを除く全ての図がツーラン（ベトナム語名はダナンĐà Nẵng、沱瀆）

38 「弘定5年5月11日付安南国大都統阮潢書簡写」（『歴朝要紀』144所収）。藤田励夫「安南日越外交文書集成」（『東風西声』9、2014年）、9頁に依った。

39 前掲、永積『朱印船』、211頁。桃木至朗「ベトナム北部・北中部における港市の位置」村井章介（編）『港町の世界史1 港町と海域世界』（青木書店、2005年）、204頁注29。

40 Huếは、陳朝期の化州Hoá Châuに由来する化Hoáの訛音とされるが、異論もある。現代中国語では「順化」を当てることが多いが、あくまで当て字である。1687年に阮氏の本拠が置かれて以降、阮朝成立までの漢字名は富春だが、その音はフースアンPhú Xuânであり、富春をフエと読んだわけではない。

を朱印船渡航地とし、朝尾図、荒野図、木村図、岩生成一『南洋日本町の研究』所収「南洋日本町所在地考定図」が、ここに日本町があったとしている。その根拠は、ここに朱印船が着岸したことと『茶屋新六交趾貿易渡海図』の記載である。また、ダナンの五行山洞窟内碑文には「日本營」という字句が存在する。⁴¹しかし、菊池誠一はこの「日本營」はホイアンの日本町であり、茶屋図もツーランに日本町があった証拠にはならず、ツーランに日本町はなく、ホイアンに入港するための入り口の一つだと見なすべきだとしている。⁴²ダナン（ツーラン）の発展はホイアンの衰退と並行しているとするのが通説であり、現時点ではツーラン日本町の存在は確認されていないとすべきであろう。ツーランはホイアンに向かうための投錨地であって、最終目的地はホイアンであったと考えるべきである。

岩生図^cでは、ツーランに当たる位置に「広南」という表記があり、日本町があったとするが、これはツーランに日本町があったとする意であろう。上述したように、ツーラン日本町の存在はかなり疑わしいが、加えて、やはり上述したように阮氏が広南処を治める拠点としていた広南營が存在した。これはホイアン西方の内陸部に存在していたので、朱印船の寄港地を「広南」とすることは二重の誤りということになる。

荒野図・木村図はサイゴンに日本人在住地があったとするが、これは朝尾図を引き継いだものである。⁴³サイゴンSài Gòn（漢字表記は柴棍または西貢）という名称の町が確認されるのは17世紀末以降である。阮氏が名付けた正式な名称は「嘉定（Gia Định、ザーディン）」だが、それもやはり1697年の事であって朱印船貿易の時代とはズレがある。管見の限りこの地に日本人が在住していたことを示す史料はなく、朱印船渡航地・経由地としても確認されていないので、航路も引くべきではない。よくある誤解として、サイゴンがメコン川流域

41 黒板勝美「安南普陀山霊中仏の碑について」（『虚心文集』8、吉川弘文館、1940年）、321-330頁（原載『史学雑誌』40-1、1929年）。

42 前掲、菊池『ベトナム日本町の考古学』、112-114頁。茶屋図についての最新の研究は、菊池誠一（編）『朱印船貿易図の研究』（思文閣出版、2014年）を参照。

43 岩生成一『近世に於ける日本人の南洋発展（講演集第104回）』（啓明会事務所、1941年）の「日本人南洋発展歴史地図」も、サイゴンを「日本船寄港地」にして「日本人雑居地」としているが、他の岩生氏の著作にはこのような記述は見られない。これが朝尾図の典拠となったかどうかともよく分からない。

に位置しているというものがあるが、ドンナイ川・サイゴン川水系という別系統の河川に面している。メコン川を遡ると日本町が存在したカンボジアのプノンペンやポニエ・ルーに至るが、⁴⁴サイゴンから内水路でメコン川に入ることにはできず、カンボジアに向かうために朱印船がサイゴンに一旦寄港した記録も管見の限りない。

このほか永積図と荒野図では、トンキンとチャンパのみあってコーチシナが記載されていないため、地図だけからはフェフォやツーランがチャンパの港であるかのような誤解を与える可能性がある。地図だけが元の文脈を離れて引用・転載されてしまうこともあるので、適切な補足が必要である。

本稿では詳説し得ないが、朝尾図・荒野図・木村図に記された「華僑活動地」にも問題がある。元の地図作製者の意図としても、代表的な地名をあげただけであって華人の活動地が地図に示された地点に限られないことは前提であろうが、それでも、明らかに華人町が存在していたホイアンに印がないなど不備がある。華人の活動は東南アジア全域に及んでおり、私見では、シャーバンドルなど華人の頭目がおかれて一定の自治が許されていた都市に限るなどしないかぎり、「華人の活動地」といったあいまいな表現で地図にプロットすることは不可能である。

V

以上、代表的な朱印船貿易・日本町関連図に記載されているベトナム関係の事項について、いくつかの訂正と指摘を行った。小論のような訂正・指摘は、学術上の「新規の知見」と言い難いため、専門の学術論文などで明示的に訂正される機会はそれほど多くない。指摘する場合も注で個別に触れるだけのことが多くなろうから、論文のタイトルと離れていた場合に他地域研究者の目に止まりにくいと想像される。これに加えて、朱印船貿易・日本町に関する史料は、日本語だけでなく、中国・ベトナムの漢籍、ポルトガル語・オランダ語をはじめとする西洋諸語、東南アジア諸地域の現地語など多くの言語にわたるだ

44 杉本直次郎・金永健『印度支那に於ける邦人発展の研究：古地図に印されたる日本河に就いて』（富山房、1942年）。

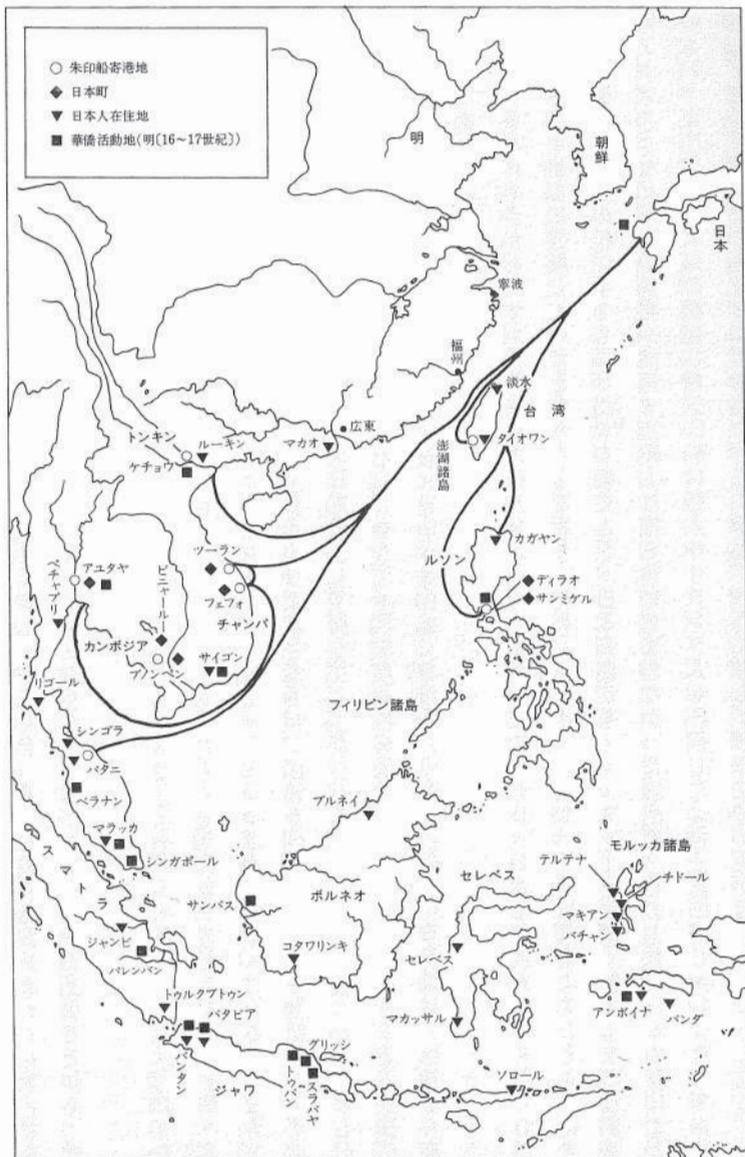
けでなく、現地語から西洋語や日本語に写した表記や同時代人の誤解などもあって史料批判が簡単でないことも多い。そのため、冒頭で記したかつての筆者のように、「自分の知らない・読めない史料に典拠があるのではないか」との疑念を払拭するのが困難なのである。

当然ながら、本稿での指摘はいたずらに先学や出版社の瑕瑾をあげつらうことが目的ではないし、筆者の指摘に誤り・不正確な点が含まれている可能性もある。しかし、上述の事情を踏まえれば、専門地域や分野を異にする研究者間での率直で積極的な疑問の提示や意見交換が必要なことは明らかである。

朱印船という制度は江戸幕府が作った制度である。そのため、関連史料が日本に集中して残され、かつ東南アジア各地の情報が共通性の高い形式で存在する点で、各国史に棲み分けしがちで全体像を構築しにくい東南アジア史研究にとって極めて重要な研究領域である。筆者の能力の限界から本稿ではベトナム部分についての指摘に限られたが、他地域についても同様の指摘が今後なされ、これに対して日本史側からの反応があればさらなる研究の進展が見込めるはずである。本稿がそのような良き循環を促進する一助となることを願っている。

謝 辞

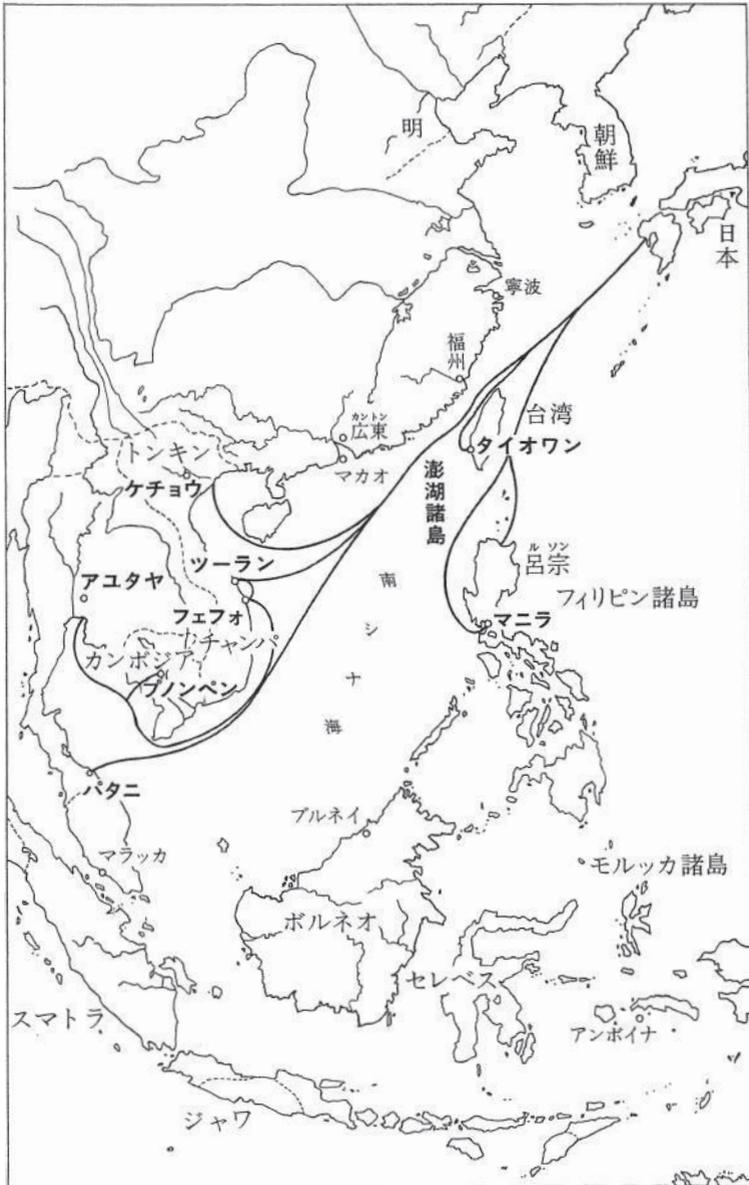
ルーキン掲載の事情についてご教示を賜り、その際の私信内容の公表をご承諾下さった荒野泰典先生に深く感謝申し上げます。



6 — 朱印船航路図

[図 2 : 荒野野] 荒野泰典 (編) 『日本の時代史 14 江戸幕府と東アジア』 (吉川弘文館、2003年)、31頁

朱印船航路図 (太字が寄港都市名)



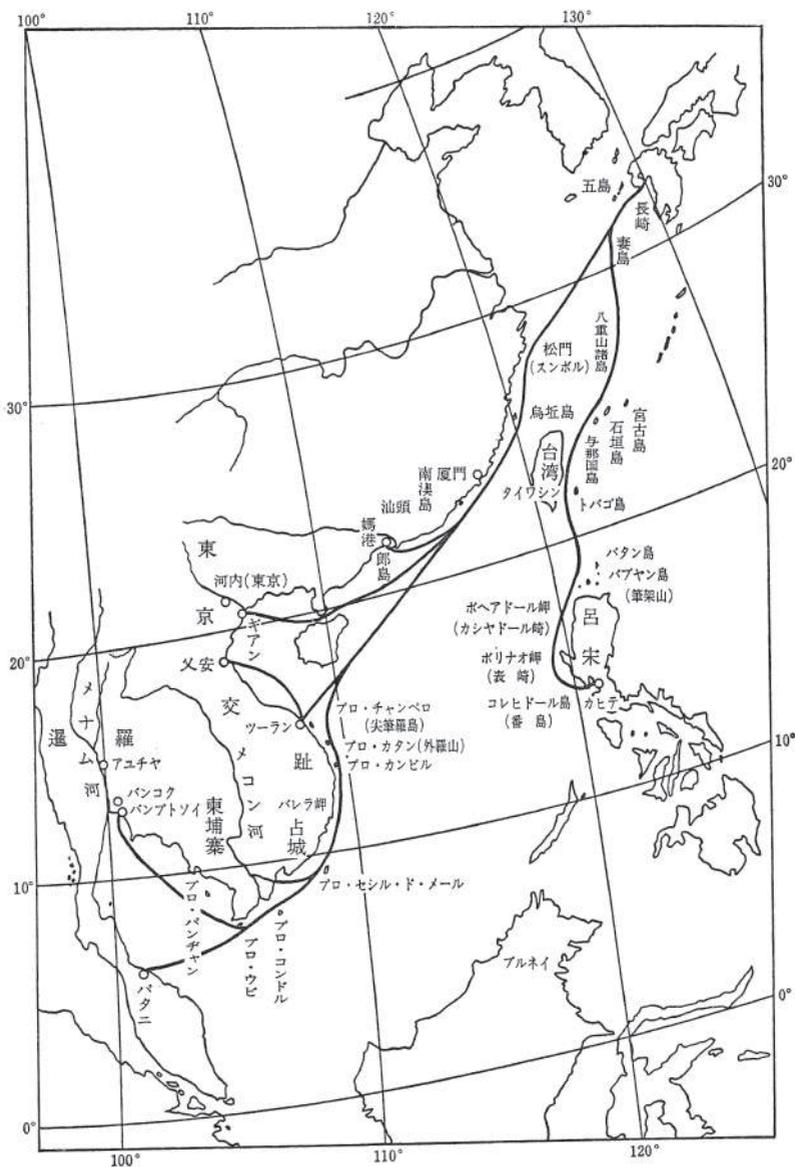
〔図3：永積図〕永積洋子『朱印船』（吉川弘文館、2001年）、237頁



[図4：朝尾図] 『週刊朝日百科日本の歴史31 中世から近世へ—⑨出島と唐人町』(朝日新聞出版、1986年)、269頁

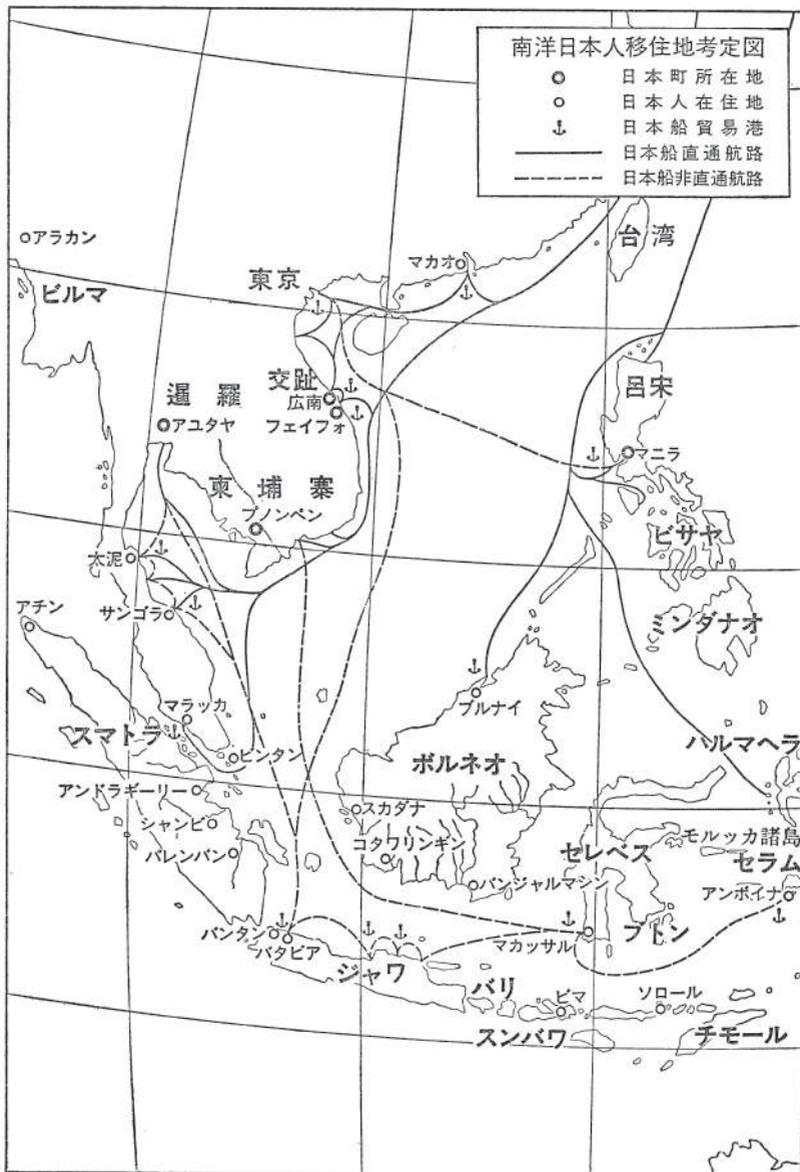


[図5：朝尾図のハノイ付近拡大図]



朱印船主要航路考定図

[図7：岩生図b] 岩生成一『新版 朱印船貿易史の研究』(吉川弘文館、1985年)、193頁



日本人南洋移住考定図

[図8：岩生図c] 岩生成一『続南洋日本町の研究』（岩波書店、1987年）附図